

JapaNewsletter (毎月 1 日発行)



INDEX

1. コラム：自然と共生する地域空間をどう編み直すか
2. 寄稿：西田幾多郎と鈴木大拙の『生きる』智慧 (哲学を愛する鎌倉市民 伊藤紘一)
3. 解説：実家じまい・墓じまいにみる日本社会の承継問題
4. 関連情報：「旬報 時代のシグナル！」として切り出し
5. 連携団体及び Japa からのご案内
6. 読者の声：
 - ・ 人新世紀の出現に憤る龍 (経済評論家・作家 高橋琢磨)
 - ・ 第二の人生生涯現役で行く その 16 (作詞・作曲家 高橋育郎)
7. つばやき (編集後記に代えて)

注：担当執筆者名の記載のない項目は、編集発行人(芝原靖典)による。

※ 本 Newsletter は Japa 日本専門家活動協会が毎月 1 日発行の会員及び関係者向けの Newsletter です。
1 ヶ月後に当協会の HP <https://japa-fellowlink.wixsite.com/japa/newsletter> に公開しています。

◆◆ 「旬報 時代のシグナル！」ご購入の案内 ◆◆

時代構造が大きく揺らぐ今、何が時代の本質的な変化なのか。表層事象ではなく構造的なシグナル情報を厳選し、社会システムデザイナーによるキュレーション旬報 [毎月 3 回 Japa 会員向け] を発行・配信中。入会をお待ちしています。

1. コラム:自然と共生する地域空間をどう編み直すか

(Japa 日本専門家活動協会代表理事 芝原靖典)

いま、日本の地域空間は、人口減少、耕作放棄地の広がり、都市の「熱」環境悪化や内水氾濫(大雨などで排水が追いつかず市街地に水があふれる現象)が重なり合いながら、静かに大きな転換点を迎えている。国土審議会も、20 世紀の国土形成が空間的、量的拡大を基本としていたことを指摘しているが、そうした戦後以来の拡大を前提に組み立てられてきた空間認識そのものを、超長期の視点から組み替えられるかどうか問われている。高齢化や過疎化、森化(人の利用や手入れが弱まり、農地や草地在に森林化していく現象)が同時に進むいま、これらはもはや別々の分野の問題ではなく、一つの地域空間の問題としてとらえ直す必要がある。

近代日本の地域空間は、河川制御主義(川を制御すべき対象として見る考え方)、山地開発、都市集中という三つの論理によって形づくられ、戦後復興から高度成長期にかけて強い実行力を発揮した。「土木国家」という評されるほどであった。しかしその成功は、人口が増え続け、経済が拡大を続けるという神話的前提のうえに成り立っており、森、川、農地、集落、都市、海のあいだにあった関係性、そこに根ざした文化を、いつの間にか弱めてきた。20 世紀型の国土観から 21 世紀型の地域空間観へと組み替えられるかどうか、いま問われている。

そこで軸になるのが、流域圏(降った雨が同じ川や海へ集まり、人の暮らしとも結びつく空間単位)という単位から地域を読み直す視点である。日本の国土の 7 割を占める深山・里山、そして世界第 6 位の海岸線を有する里海は、単なる景観ではなく、人の関与と自然のはたらきが長い時間をかけて折り重なった動的な仕組み・文化・風土であり、保全と利活用を対立させず、更新的に継承していく発想が求められている。流域圏の意義は、流域全体ひいては国土としてのレジリエンス(外からの衝撃を受けても機能を保ち、適応していく力)の維持・向上にある。

再生可能エネルギーの導入や都市の再自然化も、この視点のもとで考え直す必要がある。脱炭素は避けがたい課題であるが、どこに、どの規模で置くかという地域空間との整合が問われている。都市も、雨や熱に対する自然の機能を内部に取り戻す方向へ再定位されるべきである。

人口減少下の居住地の縮退/減少は、撤退でも一律の集約でもない。住み続ける自由と、支え続けられる条件とのあいだには緊張があり、地域ごとの条件に応じて住まい方/暮らし方/生き方の選択肢を残すことこそが本質である。その先には、居場所(安全・安心に過ごせ、無理に役割を果たさなくてもよい場)と舞台(自己表現や挑戦が受け止められ、自分の力を外へ出せる場)としての Well-being(よく生きること)に資する空間/風景という課題が控えている。里山や里海の保全についても、OECM(保護区域の外にありながら、地域の慣習的な管理を通じて生物多様性の保全に貢献していると認められる区域を指す国際的な区分)の議論が示すように、固定的に守るのではなく、持続的な関わりのなかで継承していく視点が重なってくる。

地域空間のための「土木」も本来、人が自然の条件のなかで生き続けるための基盤を整える営みであったはずである。生き延び生き続けるための空間から、よく生きるための空間へ。その転換こそが、これからの日本の地域空間に求められる、もっとも深い再設計であると考えられる。

補：本コラムのバックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/column>。詳細は <https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/> に掲載

2. 寄稿:西田幾多郎と鈴木大拙の『生きる』智慧 (哲学を愛する鎌倉市民 伊藤紘一)

私は 1943 年大阪府豊中市に生まれ、京大冶金工学修士を修了した後、日本軽金属、経済産業省外郭組織、阪和興業に勤務。すべての勤務先で新規事業開発に特化してきた実績を活かすために、60 歳定年を機に、ベンチャー育成コンサル企業を立上げ 21 年間 81 歳まで経営してきました。尚、2013 年より、銀座の教文館の社外取締役です。

京都の下宿が西田幾多郎に因んだ“哲学の道”に近かったこともあり、幾多郎に興味を持ちました。明治 18 年生まれ之母方の祖母の影響もあり、15 歳の高校 1 年生のときに豊中教会で洗礼を受け、勤務地が東京であった 32 歳の時に良い説教をする牧師の教会を探した結果、鎌倉に家を構えて、鎌倉雪ノ下教会に転入し、今年で 51 年経ちました。

ご存じのとおり、西田幾多郎も第四高等学校時代からの親友の鈴木大拙も、“信仰”というものを深く理解し、哲学と宗教は根本的に共振すると確信しておられた！

大拙によれば、本来の人間性とは、自由であり、創造性であり、報酬を顧みないはたらきとその自足的なありかたでもある。その内実は自己と一体であり、関係しあう他者の苦悩からの解放を切に願い、止むにやまれぬ思い(祈り、願)から行為に出る自律的内発性である！



大拙から
見た幾多郎
彼を一言で評すると
「誠実」でつぎる。



幾多郎から
見た大拙
大拙君は高い山が雲の上へ
頭を出しているような
人である。

西田幾多郎記念哲学館パンフより抜粋

幾多郎によれば、『善の研究』では「純粹経験」は自分の根底の問題であり、「実在」は哲学の始まりで、「善」は自己開花の道程、「宗教」は帰着点！

【世界がどう存在しているのかという認識と、人はどう生きるのかという人生観が交わったところに哲学の始まりがある。それは私たちを道徳のみならず宗教の世界にまで導く。そのとき人は、考えられた真実ではなく、生きられ、体得され、体現される真実を強く望むようになる。】(若松英輔著の『NHK100 分 de 名著・善の研究』テキストより引用)

石川県西田幾多郎記念哲学館・館長の浅見洋氏はクリスチャンであり、金沢大学・大学院を経て、筑波大学で博士号を取得されましたが、その博士論文を書物にした『西田幾多郎とキリスト教の対話』(朝文社 2000 年発行)を基に、西田がキリスト教や仏教などの思想に如何なる影響を与えた

かを簡潔に述べる。

【滝沢克己】西田の勧めでドイツのボン大学 カール・バルトの元に留学する。西田とバルトの二人の師の教えを活かして、キリスト教をはじめ浄土真宗、真言宗、神道などを巻き込んだ比較思想的、“宗教哲学的対話”を展開させる基を創った。

【八木誠一】1957～59年、新約聖書学研究でドイツのゲッチンゲン大学留学中、禅の古典『碧巖録』を列車で読んでいたら突如、“禅的体験”に出会い、存在と思惟は同一である、言葉以前の“覚”があると確信した。西田哲学の“純粹経験”をした！

【その他の宗教間対話推進者たち】

(禅仏教) 秋月龍珉、久松真一、西谷啓治、阿部正雄、上田閑照

(キリスト教) 武藤一雄、本多正昭、中村悦也

【西田哲学との対話により自己の宗教思想を形成しつつある人たち】

(プロテスタント) 小田垣雅也、花岡永子、延原時行

(カトリック) 小野寺功、門脇佳吉

浅見館長は、筑波大学では、ヘーゲル研究者であった故中森肇教授に師事したが、ハイデルベルグ大学客員教授・小川圭治氏は浅見館長に1989年に文部省の外地研究員としてミュンヘン大学のパネンバーク教授のもとで学ぶ機会を与えた。

彼が外地研究員となり驚いたのは、日本のキリスト教とドイツのそれは全く異質で、“それぞれの国の思惟や心情に呼応した特殊でローカルな形態”をとるという事実であり、それを知ったのが最大の収穫であったとのこと。

江ノ電・稲村ヶ崎駅から徒歩で15分の姥ヶ谷に建てた西田の別荘、寸志荘という庵は、現在は学習院大学に寄贈。岡野浩、利津子両教授が管理と同時に、『善の研究』読書会も開催。鎌倉雪ノ下教会会員の斎藤壽代さんからのご紹介で私も参加させて戴いています。

【幾多郎のお孫さんの上田久著の『西田幾多郎の妻』1986年南窓社刊の引用】

大正14年1月幾多郎の妻の寿美さんが亡くなられた後の西田の状況に同情した友人、安倍能成、和辻哲郎、岩波茂雄らは再婚相手との“お見合い”を、寸志荘の近くの津田塾別荘で行い、昭和6年目出度く再婚！琴さんは津田塾大学の星野学長の片腕の英語教師で、来日したヘレンケラーや詩人タゴールの通訳もする。

会長を務める湘南YWCAが鎌倉雪ノ下教会の一室を借りることに伴いこの教会の教会員となる。私がこの教会に転入する数年前にお亡くなりになるまでの12年間、鎌倉の婦人子供会館など湘南地区の社会貢献に邁進されつつ、幾多郎の学者生活に潤いを与え、クリスチャンではあっても東慶寺の幾多郎の墓に入られたのでした！

補：本寄稿のバックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/professional> に掲載

3. 解説:実家じまい・墓じまいにみる日本社会の承継問題

(日本専門家活動協会 芝原靖典)

(1) なぜ今、「実家じまい・墓じまい」なのか

「実家をどう畳むか」「墓を継ぐ人がいない」。そうした相談が、珍しくなくなっている。実家じまいは不動産の整理、墓じまいは葬送や供養の問題として、それぞれ別に語られがちである。しかし背景を数字で追うと、家族が世代を越えて人・家・土地・墓・寺・地域との関係を引き継ぐという、日本社会の承継の仕組みそのものが揺らいでいることが見えてくる。

厚生労働省によれば、2025年の死亡数は約159万人にのぼる。一方、国立社会保障・人口問題研究所の推計では、単独世帯は2020年の2,115万世帯(全世帯の38.0%)から増え続け、2050年には2,330万世帯、44.3%に達する。

多くの人が亡くなる一方で、それを引き受ける/引き継げる家族は小さくなっている。問題は「誰が継ぐか」から、「継ぐ主体そのものがあるのか」へと移りつつある。

(2) 承継の空白としての空き家・所有者不明土地

総務省の令和5年住宅・土地統計調査では、全国の空き家は900万2千戸、空き家率は13.8%と過去最高を記録した。国土交通省の令和6年空き家所有者実態調査によれば、空き家取得の理由の57.9%は相続であり、相続前に何らかの対策を講じていた世帯は23.0%にとどまる。土地についても、登記簿だけでは所有者の所在が判明しない土地が全国の23%に及ぶとされ、公共事業や防災工事の障害になっている。

2024年4月からは相続登記が義務化されたが、登記は所有者を明らかにする制度であって、利用可能な資産に変える制度ではない。相続放棄の受理件数も2024年に30万件を超えており、負動産を引き受けない選択が広がっている。

(3) 身寄りのない高齢者と死後の事務

家族の縮小は、生前の見守りと死後の対応という機能にも及ぶ。成年後見制度は本人の存命中の財産管理を支えるが、死亡と同時に権限は終了し、葬儀や納骨、遺品の処分といった死後の事務まででは対応しきれない。この隙間を死後事務委任契約などで補う動きが広がっているが、判断能力が十分なうちに準備しておく必要がある。

警察庁が2024年に初めて集計した統計では、自宅で一人暮らしのまま亡くなった人は年間7万6,020人にのぼり、うち76.4%を65歳以上が占めた。見守りや死後対応という、かつて家族が担ってきた機能そのものが、社会での支え直しを迫られている。

(4) 墓・寺という最後の砦にも及ぶ承継問題

墓についても同様の変化が進む。厚生労働省の衛生行政報告例によれば、改葬件数は2021年度の11万8,975件から2024年度には17万6,105件へと、3年間で約48%増加した。墓が遠方にある、子どもがいない、負担を残したくないといった事情から、永代供養墓や合葬墓など、次世代の承継を前提としない選択が広がっている。

寺院墓地の場合、墓の承継は檀家関係とも結びついており、文化庁は宗教活動継続の困難要因として後継者不在と信者減少を挙げている。宗教活動を実質的に行っていない「不活動宗教法人」も、2024 年時点で全国 5,019 法人と、前年より 588 法人増加した。

墓を継ぐ人がいないだけでなく、墓や祭祀を支えてきた寺自体にも継ぐ人がいないという、二重の承継問題が生じている。

(5) 家族が一括して担ってきた機能の分解

表 承継の 6 層構造(従来と現在の対比)

承継するもの	従来のあり方	現在生じている問題
人の支援	家族・親族が担う	単身化、遠距離家族、身寄り問題
家・土地	子や親族が相続し管理する	空き家、管理不全、所有者不明
財産・家財	家族が整理し承継する	相続・遺品・死後事務の複雑化
墓・仏壇	子孫が承継する	墓じまい、無縁化、永代供養
寺との関係	檀家として世代を越え承継	檀家の減少、寺院の後継者不足
地域との関係	世帯を通じて承継する	自治、祭り、共同管理の担い手不足

従来、家族はこれらの機能を一つのまとまりとして担ってきた。しかし家族の規模が縮小し、離れて暮らすことが当たり前になった社会では、このまとまりを維持することが難しくなっている。これは家族の責任感が弱くなったという話ではなく、家族が居住、財産、祭祀、地域関係までを一体で引き継ぐための社会条件そのものが変わったということである。

(6) 私的承継から社会的承継へ、そして地域経営の課題へ

家族が継げなくなったものを、行政や市場のどちらか一方だけに委ねることは現実的ではない。必要なのは、家族が一括して担ってきた機能を分解し、本人、親族、地域、寺院、専門職、民間事業者、自治体、国の間で組み直すことである。相続登記の義務化や相続土地国庫帰属制度、永代供養や合葬墓の広がり、いずれもこの移行を後追いする形の対応と位置づけられる。

この構造は地方創生にも直結する。移住や観光、企業誘致といった「つくる政策」だけでなく、家、土地、墓、寺社、集会所といった既存の資産や関係を、どう継ぎ、どう変え、どう畳むかという視点が、これからの地域経営には欠かせない。「じまい」という言葉は、必ずしも消滅のみを意味しない。

実家を地域の拠点に転用する、個人墓を合葬墓へ移す、寺が福祉や防災など新たな役割を担う。こうした動きも、形を変えた承継として捉えることができる。

かように、実家じまい・墓じまいは、単なる後始末ではなく、家族が継ぐ社会から、継ぐ人がいなくても放置されない社会への転換を映す事象として捉えるべきである。時代は変わってきている。身近な社会システムのリデザインが問われている。

補：本解説のバックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/column/>、詳細は <https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/>

4. 関連情報

本年度より、世の中の動きが激しく、月刊で紹介するには時機を逸する状況となってきたことを受け、従来の「関連情報」を Newsletter から分離させ、「旬報 時代のシグナル！」として、よりタイムリーに「直近 10 日間の時代のシグナル」としてキュレーションし、配信(毎月 1 日、11 日、21 日発行:発行日が土日の場合は週明け・祝祭日の場合は翌日)するように変更しています。

本旬報は、既往の分野・組織・枠組み・年齢・地域・概念を越えて、社会課題・地域課題に対して、個人として社会に何かを起こしたいと考えている人に、時代の構造的な変化を読み解き、自らが動き出すための手がかりになればとの思いでキュレーション編集しています。

文献情報は対象期間(直近 10 日間)内に公表・更新されたなかから編集発行人が厳選し、かつ、発行主体・日付・URL が確認できるものに限定しています。

■「旬報時代のシグナル」の構成 ※直近号(2026 年 8 月中旬号)のタイトル

【今旬の問い】 外部の「正解」が揺らぐ時代に、個人は自分の「判断の軸」を持てるか。

【時代環境】 国家の変化が暮らしに直結する新しい与件

[関係文献情報 4 件](#)

【時代構造】 「過去の正解」を前提にしない社会構造への転換

[関係文献情報 5 件](#)

【日本創生・地方創生】 地域資産を「残す対象」から関係を生む資源へ

[関係文献情報 3 件](#)

【社会的孤立・孤独・Well-being】 孤独を個人の弱さではなく関係設計の問題へ

[関係文献情報 5 件](#)

【思惟・社会システム論】 物差しを選ぶ側から、物差しをつくる側へ

[関係文献情報 4 件](#)

この「旬報 時代のシグナル！」は **Japa 会員(会費納入者)のみに限定配信**しています。購読をご希望の方は、Japa の会員(**一般会員、会費 3,000 円/年**)としての入会が必要です。

購読(Japa 入会)に関するお問合せは、本 mail にその旨記載して返信ください。

5. 連携団体及び Japa からのご案内

▼JCAABE 一般社団法人日本建築まちづくり適正支援機構「コンクール」の案内

- ・ テーマ:JCAABE 建築まちづくりコンクール 2026
／日常(いま)と非常時(もしも)をつなぐデザイン
- ・ 一般部門:現存する建築やまちづくり活動、学生部門:アイデアコンペ
- ・ 応募締切: 9 月 15 日
- ・ 公開審査:10 月 25 日
- ・ 審査員:市古太郎、岩淵諒子、田中元子、三井所清典、泉山壘威、田島則行、津川恵理、
栃澤麻利、山本想太郎、連健夫
- ・ 主催:JCAABE 日本建築まちづくり適正支援機構
- ・ 協力:キャリア・ナビゲーション、HEAD 研究会
- ・ 詳細:JCAABE ホームページ <https://jcaabe.org/contest/contest2026/>

▼青山 Hicon 4 回シリーズ「サイバーセキュリティ政策研究会」の案内

【第 1 回】

- ・ テーマ:我が国の安全保障政策/経済安全保障政策とサイバーセキュリティ
- ・ 開催日時 2026 年 9 月 18 日(金)午後 14 時半—17 時(対面開催のみ)
- ・ 主任講師 黒江哲郎氏(元防衛事務次官)/前田哲氏(元防衛省防衛政策局長)
- ・ ゲストスピーカー報告:講師 笹原英司氏(事例研究)
- ・ 終了後、18 時から懇親会予定
- ・ 詳細および申込:サイバーセキュリティ政策研究会
https://www.aogaku-hicon.jp/cyb-a1_4series_cybsecurity_kenkyukai/

▼Japa&青山 Hicon 共同「研究会」の参加者募集の案内

- ・ テーマ/名称:ひきこもり等支援システム開発普及研究会
- ・ 共同主宰:Japa、青山 Hicon(青山ヒューマン・イノベーション・コンサルティング(株))
- ・ 設立・活動:20226 年 4 月設立。5 月より Zoom 会議にて毎月 1 回開催中
- ・ 参加者:行政、支援機関、有識者、IT 実務者、その他 現時点の参加者数 23 名
※ 参加者歓迎:プロボノ、レベニューシェアで共創いただける当該分野の専門家・
実務家、IT/AI エンジニア、社会課題解決関心者
- ・ 参加申込:Japa 事務局

▼JapaNewsletter 掲載写真の募集

JapaNewsletter の冒頭に掲載する写真を読者の皆さまから募集しています。

掲載を希望する写真(著作権所有/フリー)がありましたら、画像 file をキャプション付きで事務局までお送りください。JapaNewsletter 編集仕様に則り掲載いたします。

ただし、掲載希望多数等、事務局の判断で掲載できない場合がございます。

▼Japa Newsletter の「読者の声」の募集

Japa Newsletter に関する感想・ご意見、その他投稿を、随時、お待ちしております。

▼Japa 日本専門家活動協会の会員募集

Japa は、会員(個人)と連携団体の方々の参加と協働により活動しています。

Japa は、随時、会員[正会員(年会費 1 万円)、一般会員(年会費 3 千円)]を随時募集しています。会員になると、「旬報時代のシグナル」(月 3 回発行)が講読できます。

▶入会案内の詳細 <https://www.japa.fellowlink.jp/admission>

6. 読者の声

■人新世紀の出現に憤る龍

(経済評論家・作家 高橋琢磨)

(Japa Newsletter 2026 年 8 月 1 日号「寄稿:ゴリラからのメッセージ、再び」を読んで)

55 年も前にゴリラが怒っていたこと知りませんでした。

金輪際にいる龍が憤ったのは比較的最近のことでした。

地震列島、日本における地球観というよりも大地観は、黒田日出男『龍の棲む日本』によれば、漂う日本を「国中の柱」が大地に繋ぎ止めていて、それで平穏が保たれているというもので、神仏習合を経て仏教の宇宙観を取り入れて14世紀中頃に形成されたということです。神仏習合という意味は、地震が起こるのは龍が暴れることで起こるという具合に神社の要素が強いのですが、神社にある要石、つまり動かない石になっているのは、その柱が大地の最も深い部分である金輪際から生えているという具合に、仏教の宇宙観と結びつけられているからです。

「日本書紀」の時代には、この柱で日本は繋ぎ止められているというところとされる場所が全国に点在しているとされていたのですが、金輪際と結びつけられるようになった14世紀中頃になると、西の要石は琵琶湖の竹生島であり、東の要石は、「御座石(みましいし)、石御座(いしのみまし)」などと呼ばれる鹿島神宮の要石へと集約されていったようです。もちろん、要石は各地の神社に今も残されていますが…。

地の中に閉じ込められた龍は、大地神龍たる「蟠龍」ということになるのですが、同じ中世でも13世紀には蒙古襲来があり、竹生島の龍を初め諏訪の青龍など各地の龍が襲来したつくしの海に嵐を起こし蒙古の船を翻弄したという守護神待望の世相のなかで生まれた龍でもあるのです。



筆者は、龍にまつわるこうした神話がなくなって来た現在、昔ながらの龍を描くのはどうしたものかと考えてきました。まったくの素人、どの公募展に出しても通らない腕前。それでも人新世紀とは人の世、一流の先生と話はでき教を乞うことができます。すこしずつうしくなれば。

自称水墨画家:先生、この龍、どんなもんでしょうか。

土屋禮一先生:水墨というのはプロの日本画家にとってハードルが高い領域だ。だが、素人は「僕は水墨をやります」と簡単にいう。・・・龍を描くとすれば、どこかおどろおどろしたところがないとだめだ。

自称水墨画家:先生、お言葉ですが龍神が地震や嵐を起こしたり奇跡をもたらすという神話が消えた今、昔ながらの龍というのは現代人に受け容れられなくなって可能性があります。現代風の龍の貌として、現代の龍王を名乗るブータンの国王の貌(龍顔)をイメージして描くというのはどうでしょうか。

筆者は毎年の「午前の会」には「今年の龍」一点を必ず出展することにしてきました。昨24回には創画会理事長の滝沢具幸先生が会を覗いてくれました。

滝沢具幸先生:「桜に臥わる龍」だというのだからリラックスしていてもいいが、龍なんだからリラックスしているなかでも、厳しい視線なり、凜としたところがなくてはならないだろう。

今年のテーマは、人新世紀です。人新世紀は龍にとってとりわけ住みにくい時代です。龍は金輪際退避し人新世紀の到来を憤り厳しい表情をしています。金輪際は誰も見たことがありません。そこで参考にした構図が智積院にある三部権現社の拝殿に描かれた龍図で、貌はやはり龍王が怒りを露わにしたと想定しました。これが「人新世紀⑩ 人新世紀到来に憤る龍」とした背景ですが、筆者にとってもブータンの国王の慈愛に満ちた表情から「おさらば」する機会になりました。

25回も覗いてくれた滝沢先生、貌に工夫をしたね、何度も描き直したのかな。ダイナミックな姿になっており、金輪際か、知らないがバックを白と黒に塗り分けたこと効いている。

■第二の人生生涯現役で行く その16

(作詞・作曲家 高橋育郎)

奇跡の作詩作曲家と言われて

私が小学校に入る昭和16年に尋常小学校が国民学校になった。この年12月8日、ハワイ真珠湾攻撃によって、大東亜戦争が勃発し、20年8月15日に終戦。そして22年3月、卒業したときに国民学校は終わって、新制に移行し、中学は3年に。小学6年とあわせて義務教育になった。

音楽は「唱歌」と呼ばれていたが、この年から「音楽」となった。教科書は「音楽」となったが、楽典などの音楽教育は全く教えられなかった。ドレミファソラシドの音階すら教えられなかった。だから音楽無教育世代といわれ、また音楽コンプレックス世代と呼ばれた。

そこで高校では、音楽を選択せず、美術部で通した。その美術は中学になって、急に才能が芽生え、教師に勧められて入部して高校まで通した。しかし、歌うことは幼少期からめっぽう好きで、よく

歌い教師からも注目された。音楽を聴くことも好きでよく聴いていた。

高校一年生のとき友人から合唱部に誘われたが、コンプレックス故、断った。

しかし 3 年生になると、好きが高じて合唱部が歌っているのを聞き、一緒に歌いたいと思っていき、友人の勧めもあって入部してしまった。当時、私は親の転勤で浦和から新潟市に移った。

そして、5 月に新潟大学が音頭をとって「新潟市学生音楽祭」を催し、参加しようと練習を始めたとき、指揮者が結核で倒れ、どうしようか思案投げ首でいたとき「私にやらせてください」と名乗りをあげた。皆の驚きは並のものではなかった。「きのうまで絵ばかり描いていたやつに出来るわけがないじゃないか」と怒りの声があがり、一年先輩の新潟大学生が飛んできて「あんな奴にやらせたら駄目だ。みんなしっかりしろ」と檄を飛ばした。しかし、私の熱心さにほだされてか、応援の立場に替わった。

私は小学 6 年生のとき教師が「3 拍子はこうで、4 拍子はこう」と黒板に書いたのを覚えていて、皆にやってみせたのだった。「成程、それだけ知っていれば、まあいいか」ということになった。

私は図書室で楽典解説の本を借りて読んだ。それが、すらすら理解できたことに驚いた。

いよいよ当日がきて、一同、会場の新潟市公会堂に参集した。私は初めての体験で緊張していた。先輩は、ずっと寄り添っていた。出番はプログラムの中ほど。時間が来て皆、ステージに並んだ。私が幕の裏に出ると、私に付いていた先輩は全力で飛び出して行った。

私は指揮台のところに進み、客席に挨拶をして、二階席をみると、前列の真ん中で先輩が大きく手を振っていた。忘れられない感動の一コマだ。

曲目は二曲。一曲目は、外国の有名な行進曲「希望の道」と、3年生の教科書にあった「川」だ。しかし、私は選択していないので、二曲とも知らなかった。「川」は3拍子で難しく、出だしのところで足が震えた。

私が全くの未経験だったので、他所の高校の教師が教えに来てくれ、指揮法を学んだ。教師は「川」のレコードをプレゼントしてくれて、家でも練習するようにとってくれた。そこで、私は練習をした。

音楽会の翌日、放課後に反省会をした。そこへ違うクラスの者が来て、私の指揮ぶりを褒めてくれた。また、誰かが客席から写真を撮ってくれて頂いた。

秋に当校の文化祭があり、ここで合唱団は出て、この二曲を歌った。美術展にも出品したり、演劇にちよい役で出て、新聞にカットを描いたり文化祭奨励賞をもらった。

その年の冬休みに、おもちゃの木琴を使って曲を作った。「冬が来た」という作曲しやすい詩を書いたことだ。でき上った楽譜を、音楽の先生にみてもらった。ちゃんと出来上がっていて、治すところはないといわれた。先生は音楽を選択していないのに、作曲作品を持ってきたことに驚いた顔をした。

それから、作詩の体験はいつかという、高校 2 年生になったときだ。クラス替えで隣席になった友が石川啄木に凝って、毎日短歌を作って私にみせた。そこで「高橋君も作ってみては」と。私は「短歌よりも詩を書いてみたい」と返事をする「それなら一つ作ってみせてほしい」と言った。

当時、私は築地に引越して、有楽町から浦和まで電車通学をした。途中、銀座通りを横切る。銀座にネオンが瞬き始めたころだ。そこで、その印象を詩にした。「銀座の夜空はネオン焼け」と題した。彼は「ほう、なかなかやるじゃないか」といって、親交を深めた。

作詞体験といえば、中学1年生の夏休み、一か月近く夏季林間学校へ行った。30 人ほどがいたが、先生が当校の歌をつくるよう言った。提出したのは 4 人ほどだったが、私のものが採用され、先生が賛美歌のメロディーをはめて歌わせた。

とにかく人から「奇跡の作詩作曲家」と云われた。

私も何故出来るのか不思議だった。神様が背後についているのではないかと思い、人にもそう言っていた。

実は、小学(国民学校)3 年の夏に父がタイへ軍属として派遣。母と弟の 3 人は母の実家の埼玉県杉戸町へ疎開した。一学期の間に麻疹に罹り、長期欠席し、体力が落ちて風邪をひきやすくなった。そこで 12 月の半ばから徒歩 5 分ほどの氏神様へ毎朝休まず参拝した。戦時中は、なぜか台風がなかった。これは幸いだった。

父の武運長久と自分の健康を祈ってのことだったが、健康はみるみる回復し、4 年生になると見違えるほどになった。担任が「育郎君は変わったね」と、褒めてくれた。父は終戦の翌年 5 月に復員した。私は、お礼参りをして止めた。そういうわけで神さまが助けて下さっていると思うようになった。(続く)

7. つぶやき(編集後記に代えて)

ようやく長かった暑い日が終わろうとしている。長く暑い夏は、田舎に帰っても食べられる旬の魚が変わってきていることを実感させる。台風の進路が従来と異なってきている。「記録的短時間大雨」が各地で発生し、内水氾濫も頻発している。地震も各地で頻発している。筆者自身、スマホからの緊急地震情報が流れた直後に、東日本大震災以来の大きな揺れを感じた。確かに、地球環境の変化を感じる。地政学的リスク状況も日々揺れ動いている。事件・事故の様相も変わってきている。身近な例では、昨年度(R7)産の米より今年度(R8)産の米のほうが安い。なにか、おかしい。立ち止まって、深く広く高く、そして遠くをみて考える時期が本当に来ていると感じざるを得ない。

編集発行人：Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典

発行元：Japa 日本専門家活動協会 <http://www.japa.fellowlink.jp/>

問合せ・連絡先：info@japa.fellowlink.co.jp